

スウェーデンの就学前学級の制度と実際

野中 怜香¹⁾, 是永 かな子²⁾

1) タイ国バンコク日本人学校

2) 高知大学大学院総合自然科学研究科教職実践高度化専攻・高知ギルバーク発達神経精神医学センター

Swedish Preschool Class System and Practice

Reika Nonaka¹⁾, Kanako Korenaga²⁾

1) Thai Japanese Association School

2) Kochi University Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Professional Schools for Teacher Education,
Kochi Gillberg Neuropsychiatry Centre

要約

本稿では、特別な配慮が必要な子どもも念頭に置きつつ、就学前機関と義務教育学校の連携について、スウェーデンの就学前学級訪問調査をもとに考察した。就学前学級では就学前機関の活動と義務教育学校の学習のつながりが考慮されており、子どもが新たな環境に慣れていくための支援が行われていた。就学前学級の指導方法は穏やかな雰囲気、学習規律も厳しくはなく、特別な配慮が必要な子どもも安心感を持てるような環境作りがなされていた。指導内容は外遊びや教室内での文字学習、栽培、歌の活動などの内容で、国語、理科、音楽など義務教育学校の教科学習につながる内容を含んでいた。その上で、生活に関連付けた活動や子ども自身が動きつつ学ぶ、短い時間でメリハリをつけつつ学ぶなどの配慮がみられた。環境設定では子どもの作品が多く展示されていたり、「遊ぶ部屋」があったりなど、安心感を持てる工夫が随所に見られた。日本においてもとくに行動面や学習面で特別な配慮が必要な子どもは移行の際に不適応を起こすことが多いため「アプローチカリキュラム」や「スタートカリキュラム」を活用する際に、スウェーデンの就学前学級の取り組みから学ぶことがあると推察した。

キーワード：スウェーデン、就学前学級、実践

1. 問題と目的

「小1プロブレム」が提起されて久しい。文部科学省の平成 22 年の報告では、幼児期の教育と小学校教育は教育の目標を「学びの基礎力の育成」として捉えた上でお互いの教育を理解し見通すことが必要とあった、両者の関係を「連続性・一貫性」で捉える考え方等を示している¹⁾。平成 29 年告示の学習指導要領総則には新たに学校段階等間の接続という項目を設け、幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実に向け、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導の工夫や、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫することなどが挙げら

れている²⁾。平成 30 年の幼稚園教育要領解説では小学校教育との接続、保育所保育指針解説では小学校との連携の項目が入り、共通して幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を共有し小学校教育との円滑な接続を図ることが重視されており、連続性・一貫性のある接続に向けての内容になっていることが分かる³⁾。

円滑な接続に向けて、小学校ではスタートカリキュラム編成の工夫が挙げられているが、特別な配慮が必要な子どもに関しての具体的な内容は少ない。平成 22 年の調査研究協力者会議の報告にも「障害のある子どもなど特別な支援が必要な子どもに対する幼小接続に当たっては、家庭や地域の医療、福祉等の関係機関と連携することが必要である。家庭や地域の人々、関係機関の理解の広がり、各学校・施設の教育への連携・協力の意識を

高めることが期待できる」という記述はあるが、具体的な内容は記述されていない。小学校・中学校に通う児童生徒の 4.3%が特別支援教育を必要としている現状にある中で⁵、より特別な配慮の必要な子どもに注目した連携の検討も依然として少ない。牧野らは、特別支援教育は文部科学省から発した制度であるが、保育所でも障害児保育を充実するために身近な支援機関として、特別支援学校との連携を強く望んでいることを明らかにし、このような現場に対し、省庁の管轄を超えた支援や連携の強化を強く望みたい、と述べている⁶。

さて本稿では国外の保幼小接続の取り組みとして、スウェーデンに着目したい。スウェーデンには日本の小・中学校にあたる義務教育学校としての基礎学校と日本の幼稚園・保育園・認定こども園にあたる就学前機関の間に無償で年間 525 時間教育が受けられる就学前学級、通称 0 年生がある。子どもの興味・関心・好奇心を尊重し、遊びを通して子どもの想像力、洞察力、想像力、自信などを伸ばすことと、義務教育学校への移行を促進する目的で授業のような数や文字、科学などに関する、義務教育学校への橋渡しを意識したテーマ活動が行われている⁷。以上をふまえて、本稿では特別な配慮が必要な子どもも念頭に置きつつ、就学前機関と義務教育学校の連携について、スウェーデンの就学前学級訪問調査をもとに考察することを目的とする。

2. 方法

本研究は就学前機関と義務教育学校の連携について、スウェーデンにおける就学前学級訪問調査に基づいて、文献検討も行いつつ、分析する。訪問調査の概要は以下である。2019 年 3 月 26 日、スウェーデン第二の都市イエーテボリ市近郊のオイレシヨー(Öjersjö) コミューンにあるオイレシヨーブルーン就学前機関(Öjersjö brunn förskola)の就学前学級を訪問し、屋外での活動と屋内の活動を参観した。調査の際には研究の趣旨、目的、プライバシー保護の厳守、データは研究目的以外に用いないことなどを説明して、同意を得たのち、写真撮影や質問を行った。

3. 結果と考察

3. 1 スウェーデンの就学前支援および保育・教育制度

まず、スウェーデンの就学前支援および保育・教育制度について示す。スウェーデンでは、1 歳から 5 歳まで 1996 年に教育当局の下で幼保一元化された就学前学校

(Förskola)に通い、7 歳から 9 年間基礎学校(Grundskola)に就学する。スウェーデンでは育児休業制度(親保険制度)が充実しているため 0 歳児保育は実施されていない⁸。そして 1997 年から 6 歳を対象に就学前学級(Förskoleklass)が設置されている。大城はこの就学前学級は就学前学校と基礎学校における学びをつなげるために重要な役割を果たしている、と指摘する⁹。就学前学級の設置の背景について大野¹⁰は以下のように述べている。スウェーデンの就学前学級が公的に設置されたのは、1998 年である。1991 年に「柔軟な就学制度」が制定され、6 歳児が基礎学校へ就学する機会を与えられたことがきっかけとなった。公的保育の整備に伴い、あらゆる子どもに対して 525 時間の無償保育保障として就学前学級に通う権利が与えられた。就学前学級は、ほぼ基礎学校に併設されており、活動には基礎学校のカリキュラムが適用されるため、基礎学校の「0 学年」として、就学前学級が教育制度上、就学前保育・教育と義務教育の中間に位置付けられている。

白石は親の子育てと仕事の両立を支援することと、子どもたちの健やかな発達と学びを援助すること。この二つの目的を達成するために、養護と教育が一体となった実践を目指しており、その内容は諸外国からも高い評価を得ていることを指摘する。そして、エデュケーションとケアの一体性を「エデュケア」という言葉で表現したことから、エデュケア・モデルとも呼ばれている、と述べている¹¹。

そして大城¹²、就学前学校カリキュラムは 2010 年に大幅に改訂され、2016 年にも一部改訂されており、2018 年に再び大幅な改定が行われる予定であると述べている。その背景には、就学前学校が保育だけでなく特に教育面で成果を上げることが期待されていることが指摘でき、近年国際的な学力調査である PISA の成績が低迷する学力への対応としてではないかと指摘している。2010 年から学校教育改革が進められており、就学前学校は生涯にわたる学びの出発点であり、基礎学校での成果を上げるためには、その前段階の就学前学校での学びを重視するべきとされた。その結果、就学前学校の活動において教育的な要素が積極的に取り入れられるようになったと述べている。

このように、スウェーデンには就学前機関としての就学前学校と義務教育学校の間に就学前学級が存在し、切れ目のない学びの環境が整備されている。就学前学級の誕生は、エデュケアという考え方も一つの要因としていることも示された。

3.2 就学前学級の参観

3.2.1 屋外での活動

次に授業参観の結果を示す。

まず、屋外で活動し、次に屋内での活動に移行した。屋外での活動では、隣接する基礎学校の敷地内で2チームに分かれてゲームを行っていた(写真1)。ルールは、まず地面に描かれた橋のような絵の両側から1人ずつスタートをする。次に両者が出会った所でじゃんけんを行い、勝った側は先に進み、負けた側は絵から離れ、次の人がスタート位置から進む。どちらかが相手チームのスタート位置にたどり着いたら勝ち、という内容である。まだ寒い3月に屋外で体を動かし、勝ち負けを判断して、チームで協力する活動であった。このように屋外では遊びを通じて体を動かすような活動が組まれていた。スウェーデンの就学前学校も基礎学校も天候にかかわらず、休み時には積極的に屋外に出るように促す。

次に徒歩で就学前学校へ移動した。移動の際には自転車・徒歩道路を100メートル程度歩くのみなので、整列させることなく、教員らの近くにいれば1人でも2人でも手をつないでも手をつながなくても構わない状態で、各自自由に移動していた(写真2)。

就学前学校の裏手は森につながっており、自然を身近に感じられる環境であった(写真3)。基礎学校も就学前学校も、建物は平屋か2階建て、いくつかの建物が点在する構造であった。就学前学校も2階建ての建物で独立して設置されていた。



写真1 外遊び

写真2 移動



写真3 建物の外観

写真4 子どものロッカー

屋外から帰ってきた後の衣服類の着脱は各自で行っていた。自分で上着などをロッカーにかけたり、手袋を

ボックスに入れたりとスムーズにやるべきことを行っていた。一人ひとりにロッカーがあり(写真4)、下段は子ども自身が脱ぎ着したり、使用したりするものが収納され、上段には必要に応じて使用するものが置かれていた。必要な場合に学校から借りる共有物は種類別にボックスに入れていた(写真5)。見てわかる環境設定とともに、一人ひとり習慣化された流れが子どもに定着しているようであった。就学前学級の子どもは二階にあった。二階は日の光が入る大きめの窓のある廊下があり(写真6)、校舎内は太陽光で非常に明るかった。



写真5 種類別ボックス

写真6 大きい窓のある廊下



写真7 子どもの作品

写真8 子どもの作品



写真9 子どもの作品

写真10 子どもの作品



写真11 子どもの作品

写真12 子どもの作品

教室内外ともに子どもの作品が多く展示されていた。子どもたちの日ごろの活動の過程・成果が一目で見てわかるようになっていた。

写真7はテーマが「宇宙」の子どもの作品であり、写真8はテーマが「生き物」の子どもの作品、写真9はテーマが「蜘蛛」の子どもの作品、写真10や写真11は情操教育・感情育成のための作品として嬉しい気持ちを示したハートであり、写真12は教室の入り口ドアに「歓迎」のかわりに掲示されていた。

子どもに愛着のある作品が多く飾られているため、校舎や教室も子どもにとって安心感を与えることができる環境設定になっていると考察した。

3.2.2 教室での活動

日本では朝の会にあたるのであろうか「サムリング(集まり)」の時間を参観した。

サムリングはMT(主指導, 以下MT)1名 ST(副指導, 以下ST)1名で進められていた。横山は、サムリングは保育者が一人ひとりの子どもの声を傾聴し活動に反映させること、子どもが安心して自分の思いを伝えたり互いの意見を認め合ったりすることが大事にされている、と述べている¹³。

教室に敷かれた丸いマットに子どもたちは自由に座り、今日一日の活動の確認や歌などを歌った(写真13)。

特に姿勢などの決まりはなく、自由な座り方で子どもたちはそれぞれ座り、時には寝そべる子どももいたが注意などはされていなかった(写真14)。



写真13 サムリング

写真14 サムリング



写真15 植え付けの絵を描く

写真16 誕生日で起立

ホワイトボードに貼られた絵と文字が一緒になったカードを活用しながら会は進む。参観当日の活動に「苗の植え付け」があったため、MTは子どもたちに植え付けに必要な物は何か、という問いかけを行っていた。子どもたちの中から、土や水という言葉が出てくる都度それを絵に表していた(写真15)。

次に合唱を行っていた。歌は「12か月」の歌であり、自分の生まれた誕生月のタイミングで子どもたちはリズムよく立っていた(写真16)。



写真17 個別指導

写真18 教室内の壁面

最後は一人子どもを前に呼び、MTが今日の日付などの確認や今日の文字(今回は“G”)が頭文字の言葉は何かなどの簡単な個別指導を行っていた(写真17)。

山本は、子どもたちは、あらゆる感覚、身体を通して、多様な表現をしながら、数や言葉の基礎を学んでいるため、日本のように、小学校でいきなり読み書きの学習に入るより効果的だ¹⁴と述べている。

このように、日本の小学校低学年の生活科や理科、音楽、体育(ゲーム・表現リズム遊び)、国語に通ずる内容を行いつつも、遊びを取り入れつつ比較的自由的な雰囲気の中で活動している様子であった。就学前機関と義務教育学校それぞれの内容を取り入れている環境ができていると考察した。

写真18に示されるようにホワイトボード以外の教室の壁には絵と文字を合わせた掲示物があり、日常的に文字に関心を持たせる環境設定になっていた。

個別の机で学習する場所も保障されており、各自の机には名前が貼られていた、机に引き出しはなく文房具類は共有であった(写真19、20)。



写真19 名前・共有の文房具

写真20 机と椅子

個人の収納スペースは棚の引き出しが用いられ、作った作品などをまとめるドキュメンテーションも置かれていた（写真 21）。

そして「教室」には玩具が多くある「RUMMET」と呼ばれる「遊ぶ部屋」も併設されていた（写真 22）。



写真 21 棚とドキュメンテーション 写真 22 遊ぶ部屋

室内には天井にも子どもの作品が飾られてあった。
（写真 23, 24）



写真 23, 写真 24 天井に飾られている子どもの作品

このように、サムリングの指導形態は「円」であり、子ども同士の顔がよく見える状態で、床に座ったり、寝そべったりして活動していた。この雰囲気は就学前機関に近いであろう。指導内容は「文字」としての国語や栽培としての理科、歌を歌う音楽と義務教育学校につながると考察した。

環境設定は廊下のみならず教室も子どもの作品の展示が多く、安心感が持てる雰囲気であった。同時に絵と文字を合わせた掲示物などで自然に学習につながる工夫も見られた。

4. 総合考察

今回は、特定の活動のみの限定的な参観ではあったが考察を以下に総括する。

指導内容は日本の保育園・幼稚園・認定こども園のような活動・遊びを取り入れつつも、文字や算数の内容を

扱う場面もあった。遠山は、就学前学級について、何かを学ぶというよりは、学ぶための訓練を少しずつしている、と述べている¹⁵。たしかに、外遊びやサムリングで歌に合わせて体を動かすなどの就学前機関の指導内容がありつつも、義務教育学校のような「書字」に特化した活動は今回は参観できなかった。同時に、サムリングでは文字を扱っていたため「国語」、教室内外の作品は「図工」にも相当するであろう。

就学前学級の雰囲気は穏やかであり、特に「整理整頓」や「正しい姿勢」などの学習規律はなく、荷物があるべきところあればよい、話を聞いているのであればどのような姿勢でもよい、という指導方法であった。日本では「整理整頓」や「姿勢を正して人の話を聞く」は幼稚園・保育所等でも求められることがあるが、学んでいるかに注目するか、学ぶ「態度」に注目するかのように、どのような基準で子どもに注意を促すかは国によって考え方が異なるのであろうと推察した。

5. 日本への示唆

スウェーデンには就学前機関と義務教育学校の間には就学前学級が設置されており、その実践内容は日本における滑らかな保幼小連携においても示唆的であると考えられる。

実際に日本に就学前学級を設置することは困難だと推測するが、サムリングにおける歌の指導での 12 か月の学習、書くことよりも読みを優先する指導、自然に絵と文字が関連付けられるような環境設定は、楽しみながら学びにつなげる実践として、参考にならう。

日本にはスタートカリキュラムが存在する。その存在理由は以下である。「子供は、発達の段階に応じて様々な対象と直接的、間接的に関わりながら学んでいます。幼児期の教育は、5 領域の内容を遊びや生活を通して総合的に学んでいく教育課程等に基づいて実施されています。一方、児童期の教育は、各教科等の学習内容を系統的に配列した教育課程に基づいて実施されています。このことが幼児期と児童期の教育の大きな違いと言えます。そこで、子供が新しい学校生活に円滑に移行していくためのスタートカリキュラムが必要となるのです」と¹⁶。

同時に¹⁷「生活科を核として楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切に、学ぶ意欲が高まるように活動を構成することが有効です」ともあるように、様々な刺激から学習に内容に向けての働きかけが重要であると考えられる。

そのため、具体的には幼稚園・保育所の段階で学びが

楽しみになるような移行支援としての活動をいかに組み込むか、小学校では「学校探検」を行う活動のように教科に特化した学習を行う前の活動で総合的に教科と関連付けつつ、徐々に学びに移行すること、学校という場所に慣れることに少しでも視点を置いて学習を構成することが重要であろう。

環境設定としては、就学前機関でも小学校と同じ机や椅子を園児の身近な場所に置くこと、小学校では子どもの注意が散漫にならない程度に教室の後ろなどに子どもの作品を飾るなどで教室に愛着を持てるようにすることも有効ではないだろうか。

6. 総括

本稿では、特別な配慮が必要な子どもも念頭に置きつつ、就学前機関と義務教育学校の連携について、スウェーデンの就学前学級訪問調査をもとに考察した。

スウェーデンには就学前機関と義務教育学校の間に就学前学級があり、日本にはない学びの環境が整備されていた。

スウェーデンでは「エデュケア」という考え方も包括しながら、1歳を生涯学習のスタートとして考えており、就学前学級は就学前機関と義務教育学校の移行機関として双方の指導方法、指導内容を意識していた。

指導方法としては、就学前学級の雰囲気は穏やかであり、学習規律も厳しくはなく、特別な配慮が必要な子どもも安心感を持てるような環境作りがなされていた。よって学習規律よりも学びのための練習をしている段階で

あると推察した。

指導内容は外遊びや教室内での活動、音楽に合わせて体を動かすなどの内容で、国語、理科、音楽など義務教育学校の教科学習につながる内容を含んでいるなど、就学前機関と学校の連携が意識されていた。その上で、生活に関連付けた活動や子ども自身が動きつつ学ぶ、短い時間でメリハリをつけつつ学ぶなどの配慮がみられた。

環境設定では子どもの作品が多く展示されていたり、「遊ぶ部屋」があったりなど、安心感を持てるような工夫が随所に見られた。

就学前学級では就学前機関の活動と義務教育学校の学習のつながりが考慮されており、子どもが徐々に学校という新たな環境に慣れていくための支援が行われていた。そのため、就学前学級は特別な配慮が必要な子どもも含めて全ての子どもに有効な制度であると考察した。

日本においてスウェーデンのような就学前機関と義務教育学校の「間」に特別な場を設置することは困難だとは推測されるが、「アプローチカリキュラム」や「スタートカリキュラム」を十分に活用する際に、スウェーデンの就学前学級の取り組みから学ぶことがであると推察した。とくに行動面や学習面で特別な配慮が必要な子どもは移行の際に不適応を起こすことが多いため、今後も移行支援の充実を検討することは必要となろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP18K02793 の助成を受けたものである。

註・引用文献

¹ 文部科学省(2010)「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afielldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf(2021年11月14日参照)。

² 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領 解説 総則編」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afielldfile/2009/06/16/1234931_001.pdf(2021年11月14日参照)。

³ 文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afielldfile/2018/04/25/1384661_3_3.pdf(2021年11月14日参照)。

⁴ 厚生労働省(2018)「保育所保育指針解説」

<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b.pdf>(2021年11月14日参照)。

⁵ 文部科学省(2021)特別支援教育の現状 - 文部科学省

https://www.mext.go.jp/content/20210412-mxt_tokubetu01-000012615_10.pdf(2021年11月14日参照)。

⁶ 牧野誠一, 二通諭, 山田克己, 本間譲(2013)特別な対応が必要な子どもに対する機関連携をめぐる諸問題—就学前幼児療育機関と学校教育の連携—その4 過疎地域における幼稚園・保育所と特別支援学校との連携の実情と課題『札幌学院大学人文学会紀要』93, pp. 127-153.

⁷ 山本理絵(2017)小学校への移行期の生活と保育・教育方法に関する一考察—スウェーデンにおける教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動の調査から—『人

間発達学研究』8, pp. 71-87.

⁸ 吉岡洋子, 佐藤桃子(2016)第5章 スウェーデンの子ども・子育て環境, 岡澤憲芙・斉藤弥生(編著)『スウェーデン・モデル グローバリゼーション・揺らぎ・挑戦』彩流社.

⁹ 大城愛子(2017)スウェーデンにおける就学前クラスの意義と役割—就学前クラスカリキュラムと実践を通して—『畿央大学紀要』14(2), pp. 59-64.

¹⁰ 大野歩, 七木田敦(2011)スウェーデンの就学前クラスに関する研究—「学校化」問題と生涯学習アプローチの観点から—『保育学研究』49(2)pp. 135-145.

¹¹ 白石淑江(2009)『スウェーデン 保育から幼児教育へ—就学前学校の実践と新しい保育制度—』かもがわ出版.

版.

¹² 前掲9, 大城愛子(2017)pp. 59-64.

¹³ 横山真理(2019)スウェーデン・デンマークにおける就学前教育の音楽活動『学校教育研究』23, p. 65.

¹⁴ 前掲7, 山本理絵(2017)pp. 71-87.

¹⁵ 遠山哲央(2009)『北欧教育の秘密』つげ書房新社.

¹⁶ 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター(2015)「スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方が分かるスタートカリキュラムスタートブック必携!～学びの芽生えから自覚的な学びへ～」

https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf(2021年11月14日参照).

¹⁷ 同上.